

Title	アリストテレスにおける回顧的説明パターン
Sub Title	Aristotle's theory of retrospective explanation
Author	大出, 晁(Oide, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	<p>In <i>Analytica Posteriora</i> Aristotle introduces two types of demonstrations, that is, <i>apodeixis tou di-oti</i> and <i>apodeixis tou hoti</i>. His examples are as follows: for the former, "What is near does not twinkle. The planets are near. Therefore the planets do not twinkle."; for the latter, "What does not twinkle is near. The planets do not twinkle. Therefore the planets are near." (78a 30-78b 2) The former establishes the reason, for the planets do not twinkle, because they are near, but not the converse. Thus Aristotle's explanation is a deduction of the immediate fact (not twinkling) through the remote cause (nearness). If we want to explain something, we start from established facts, then we look for a reason able to deduce them. This feature of Aristotelian explanation is combined with his notion of conditional necessity. He says often "if a house has come about it is necessary for stones to have been cut down and to have come about". (<i>An. Post.</i> 95b 33-34) But we cannot say the converse, because it is not necessary for a house to have come about, even though a foundation has come about. Consequently, "it is necessary to begin from something that is immediate and first (reckoning back) from the present". We must search for the cause of facts in the past, because the future is not accomplished and indeterminate. This kind of explanation may be called retrospective explanation, and it does not intend to provide any prediction. This retrospective explanation constitutes Aristotelian conceptual framework which was broken in the 17th century. The modern science was born, when the vector of explanation was converted into the future.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスにおける 《回顧的説明》パターン

大 出 晃*

Aristotle's Theory of Retrospective Explanation

Akira Oide

In *Analytica Posteriora* Aristotle introduces two types of demonstrations, that is, *apodeixis tou di-oti* and *apodeixis tou hoti*. His examples are as follows: for the former, "What is near does not twinkle. The planets are near. Therefore the planets do not twinkle."; for the latter, "What does not twinkle is near. The planets do not twinkle. Therefore the planets are near." (78a 30-78b 2) The former establishes the reason, for the planets do not twinkle, because they are near, but not the converse. Thus Aristotle's explanation is a deduction of the immediate fact (not twinkling) through the remote cause (nearness). If we want to explain something, we start from established facts, then we look for a reason able to deduce them.

This feature of Aristotelian explanation is combined with his notion of conditional necessity. He says often "if a house has come about it is necessary for stones to have been cut down and to have come about". (*An. Post.* 95b 33-34) But we cannot say the converse, because it is not necessary for a house to have come about, even though a foundation has come about. Consequently, "it is necessary to begin from something that is immediate and first (reckoning back) from the present". We must search for the cause of facts in the past, because the future is not accomplished and indeterminate. This kind of explanation may be called <retrospective explanation>, and it does not intend to provide any prediction. This retrospective explanation constitutes Aristotelian conceptual framework which was broken in the 17th century. The modern science was born, when the vector of explanation was converted into the future.

* 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)

近ごろ、ガリレオに対するアリストテレスの影響について論じられることがしだいに多くなってきた。たとえば、中世科学史の大家アリスター・クロンビーはこう述べている。「生涯にわたってガリレオの知的関心を支配するに至った真の宇宙論の探求は、アリストテレス哲学を出発点としていた。……ガリレオがある意味でアリストテレス主義者であったということをおさえておかないかぎり、彼のうち出した有効な科学研究のための哲学的戦略を正しく理解することはできないであろう。ガリレオがその戦略においてめざしたのは、第一に自然の全体に適用しうる説明原理の探求であり、第二に個々の具体的問題に対する正確で納得のいく解を見つけるための研究方法の確定であった。……ガリレオはアリストテレスの自然学とその諸範疇を破壊し、代わりにアルキメデス的方法を据えたが、しかしアリストテレス的学問研究の理念の重要な部分は温存した。とりわけ彼は、自然現象の『必然的証明』ということにこだわった。⁽¹⁾ いまこの指摘を文字通りに受けとるとして、ガリレオはアリストテレスの何を温存し、何を破壊あるいは変革したのか？ この小論はこの問いをめぐる筆者なりの解答をめざしている。

§1. アリストテレスにおける〈必然的証明〉

アリストテレスにおける学問論の骨格が〈論証 (*ἀποδείξεις*)〉あるいは〈論証的知識 (*ἐπιστήμη ἀποδεικτική*)〉の理念にあることは疑えぬところであろう。彼の知識論の中核をなす書物『分析論後書』1巻2章の冒頭で、アリストテレスはつぎのように言う。

ソフィストのように付帯的な仕方においてではなく、限定ぬぎの意味においてそれぞれの事物の知識をもっているとわれわれが思うのは、[1] 当の事物がそれによってある原因を、その当の事物の原因であると知り、[2] またその事物が〔いまあるところと異なって〕他ではあ

りえないと知っていると思う時である。そこからして、事物の知識をもっているということが何かそのような事柄をいうものであることは明らかである。……

さて、事物の知識ということに、〔いま述べたところとは異なる〕別の方式があるとしてもそれは後に論ずることとしよう。われわれは今、ともかく論証による知識があると主張する。論証とは知識的な推論をいう。「知識的な推論」と私が言うのは、その推論〔によって結論〕を得ることにより、われわれが〔事物の〕知識をもつ推論のことである。そこで「〔事物の〕知識をもつこと」がいまわれわれの定めたような事柄〔原因による必然的な事態の把握〕であるとすれば、論証的な知識が〔イ〕真の、〔ロ〕第一の、無中項の、〔ハ〕結論よりもいっそうよく知られえ結論よりも先であり、結論の原因である原理から出発して得られるものであることもまた必然である。何となれば、論証の原理がこのようなものである時に、原理は証明されるもの〔結論〕にとって本具の原理となろうからである。なるほど推論はこれらの原理を欠いても成立するのであろう。しかし論証は成立しないであろう。なぜならば、それは事物の知識を生むことがなからうからである。…… (61^p 9-25, 下線部分は原文傍点⁽²⁾)

ここで言われる〈論証〉あるいは〈知識的な推論〉とは、〈結論がその原因である原理から出発して得られるところの推論〉のことであり、したがって今日言われるところの演繹体系としての知識を意味していることは明らかである。この箇所は哲学史上はじめてこのような知識のありかたが明確に主張されている点で特筆に値すると言えよう。

ところで、〈これとは異なる別の方式〉の知識とは、ここで言われる原理に対する理解の仕方を意味していて、もしも原理それ自体も論証によって把握されるとすれば、循環におちいることになるであろうからして、そのような理解の仕方は〈理性の洞観〉(noûs) とよばれる (『後書』100^p 13-

15) 『後書』74^b 15-17 (『後書』74^b 15-17)

さしあたりここで推論に関する二・三の点を指摘しておくことにしよう。アリストテレスの言う推論とは、当然のことながら三段論法 (*συλλογισμός*) のことである。

すべての推論は三項によって成立する。推論の一種は、AがBについてあり、BがCについてあるという理由により、AがCについてあることを証明する推論であり、他の一種は否定の推論であって、或る何ものかが他の何ものかについてあることを一つの前提とし、或る何ものかが他の何ものかについてあらぬことをもう一つの前提とするものである。したがって、これらの前提が出発点、すなわち、いわゆる「基礎定立」(*ὑπόθεσις*) であることは明白である。なぜならば、ひとは必ずこれらの前提をこのような形で容認することによって事物を証明してゆかねばならないからである。すなわち、AがCについてあることをBを通じて証明し、さらに、AがBについてあることを他の中項を通じて証明し、また、BがCについてあることを同じようにして証明するというように。(『後書』81^b 10-18)

ところで、論証は推論によって構成されるとはいえ、単なる推論ではない。それを単なる推論から分けるものはその前提の必然性にある。

……〔論証における〕推論は必ず必然なる原理から出発せざるをえなざることになる。何となれば、真なる原理から出発しても、推論が〔必然なる結論を〕論証しないことがありうるが、必然なる原理から出発すれば、推論が〔結論を必然なるものとして〕論証しないことはありえないからである。(『後書』74^b 15-17)

しかし、論証が出発するところの必然的な原理が〈当の事物の本具の原理〉であるためには、さらに強い条件をみたすことが要求される。

それぞれの事物の論証は——証明されるべき当の事柄が、その事物がその事物である限りにおいて〔その事物について〕ある事柄である

場合には——，その事物〔に本具〕の原理から出発することなしにはありえないことは明らかなのであるから，たとえ〔いま〕，或ることの証明が真の，論証不能の，無中項の原理から出発してなされたとしても，それがそのまま，そのことの知識をもっていることにはならない．実際，もしもこのような仕方でも証明することが許されるならば，……このような種類の論法は，〔当の事物とは異なる〕他の事物にもあるような共通点に従って事物を証明するものだからである．それゆえ，これらの論法は当の事物とは類を共にしない他の事物にも適用される論法である．したがって〔この論法によっては〕ひとは当の事物である限りにおける当の事物の知識をもつことがなく，〔当の事物にとって〕付帯的な知識をもつのである．（『後書』75^b 37-76^a 2）

§2. アリストテレスにおける知識の

対象と説明の方式

このようにして，知識が本来的に論証によって得られるとして，アリストテレスにとって，知識の対象とは何であったのであろうか．彼は知識の対象としてつぎの四つの事柄をあげる．

われわれは四つの事柄を探究する．すなわち，〔1〕「事実〔何かがあるかであること〕〔ὅτι〕」と，〔2〕根拠〔それは何故かということ〕〔διότι〕」と，〔3〕「存在〔何かがあるかということ〕〔εἶ ἐστι〕」と，〔4〕本質〔それは何であるかということ〕〔τί ἐστι〕」とである．すなわち，われわれは〔1〕「〔何かがあるか〕これこれであるか，それともまた，これこれであるか」と……探究する時に「事実」を探究している．たとえば，「太陽が〔いま〕触を受けているか，それとも，いないか」を探究する場合がそれである．……それに対して〔2〕事実を

知っている時に、われわれはその根拠を探究する。たとえば、「〔太陽が〕蝕を受けている」という事実や「地球が動いている」という事実を知っている時に、「何故、太陽が蝕を受けているのか」、または、「何故、地球が動いているのか」と探究するように。

さて、これらのものについては、われわれはこのような方式で探究するが、或る幾つかのものについてはこれらとは異なった方式で探究する。すなわち、〔3〕「ケンタウロス、または、神があるか、それともあらぬか」と探究する場合がそれである。……そして、〔4〕「そのものがあるということを知る時に、われわれは「そのものが何であるか」と探究する。すなわち、「では、神とは何であるか」、または「人間とは何であるか」と探究する場合のように。（『後書』89^b 24-35）

ここで、われわれの議論に必要なのは、とくに〈事実〉(ἔτι) および〈根拠〉(ἀπόδειξις) の探究である。この論文の論旨からすればきわめて重要な、しかしわれわれの眼にはいささか奇妙とも見えるひとつの区別をアリストテレスは導入する。それは〈事実の論証〉と〈根拠の論証〉の区別と言われるものであって、『後書』のいくつかの箇所（1巻13章とくに78^a 29-78^b 13; 2巻8章, 16章, とくに98^b 3-24）で述べられている。いま、その要旨をアリストテレス自身の例に則して述べてみることにしよう。

(a1) 「惑星が近くにあること」を「瞬かぬこと」を通じて論証する場合。

惑星は瞬かない。瞬かないものは近くにある。それゆえ、惑星は近くにある。

「この推論は根拠についての推論ではなく、事実についての推論である。というのは、惑星は『瞬かぬこと』のゆえに近くにあるのではなく、『近くにあること』のゆえに瞬かないのだからである。」(78^a 39-40)⁽³⁾

(a2) 逆に「惑星が瞬かぬこと」を「近くにあること」を通じて論証

しても構わない。「そうすれば、それは根拠についての論証となる。」

(78^a 39-40)

惑星は近くにある。 近くにあるものは瞬かない。 それゆえ、惑星は瞬かない。

「こうして、それは根拠についての推論である。何となれば、第一の原因が把らえられているからである。」(78^a 40-78^b 3)

もう一組の例をあげておこう。

(b1) 「月が球状であること」を「月の盈虚」を通じて論証する場合。

(78^b 4-13)

盈虚の形で増大するものは球状である。 月は盈虚の形で増大する。 それゆえ、月は球状である。

「このようにして生じた推論は事実についてのものである。」(78^b 7)

(b2) 「その逆に中項を措定すれば、それは根拠についての推論となる。」(78^b 7-8)

球状のものは盈虚の形で増大する。 月は球状である。

それゆえ、月は盈虚の形で増大する。

「月は増大することのゆえに、球状であるのではなく、球状であることのゆえに、このような方式での増大を蒙るからである。」(78^b 8-10)

アリストテレスはほかにも「落葉」と「広葉」, 「落葉」と「葉柄と樹幹の接合部における樹液の凝結」, さらに、「月蝕」と「地球の介在」, 「雷鳴」と「雲間の火の消滅」といった例によっておなじような趣旨のことを述べている。うへの例にも見られるように、アリストテレスの言う〈原因〉は、三段論法による推論の〈中項〉としてとらえられ、それゆえ、原因の把握はまさしく〈中項の発見〉であると言われている。「『事実』, または『存在』……を知っている時、さらに、『それは何故か』, または、『それは何であるか』と探究する場合にはわれわれは『その中項が何であるか』を探究しているのである。」(89^b 37-90^a 1) 「頭脳明敏とは中項を瞬時にうまく

言い当てる一種の才智である。」(89^b 10-11) それゆえ、上例に見られる議論では、〈根拠による論証〉のほうが〈事実の論証〉よりも認識論上の価値ははるかに高いと言わざるをえないであろう。ところが、(a2)、(b2)における結論は「惑星は瞬かない」、「月は盈虚の形で増大する」といったもので、むしろ、われわれが日常的に感覚している事実と言うべきものである。それに反して、原因である中項のほうが「近くにあること」、「球状であること」といった感覚よりも遠い性質を示している。このことは、アリストテレス自身も心得ていて、(a2)に関連してこう述べている。「原因ならぬものの方が、時としていっそうよく〔われわれにとって〕知られうるものであってもいっこうに差支えない……。」(78^a 8-9) この点にアリストテレスの説明パターンのもつきわめて特徴的な性格がうかがえるのである。

アリストテレスにおいては、〈原因による説明〉は〈根拠の論証〉としてとらえられ、われわれにとって身近な、いっそうよく知られうる事実——これを簡単に〈可感的事実〉とよんでおくことにする——に関する命題を結論として導出しうるような三段論法の中項を与えることである。そして、この中項は、説明されるべき事実にくらべて感覚よりも遠く、したがって彼の言う「そのもの自身の成立ちにおいて」、「限定ぬぎの意味において」いっそうよく知られうる「いっそう感覚から遠い」(71^b 33-71^a 4)——そこで、以下端的に〈可知的〉とよぶことにしよう——ものなのである。一般に、可感的な事実は直接的で疑えないが、可知的な原因のほうは間接的で疑問の対象となりやすいであろうから、根拠の論証という説明方式は、説明されるべき事実を固定しておいて、それに適合する原因を中項の形で提示するという、ジグソー・パズル的な〈はめこみ〉方式ということになる。このような方式を《はめこみ式説明論》とよぶことにしよう。この説明方式は、アリストテレスの〈原因論〉と〈時間観〉と結びついていっそう独自の色彩をおびることとなる。

§3. アリストテレスの原因論

アリストテレスが四つの原因をあげていることは、いまさらくりかえすまでもないであろう。原因に関する『後書』(2巻11章),『形而上学』(1巻7章),『自然学』(2巻3章)の該当箇所では表現方法に多少の差異が認められるが、それらの議論を一応つぎの形にまとめて伝統的な呼称にしたがうことにする。

- (1) 物事の「何であるか」(οὐσία, τὸ τί ἦν εἶναι) : 形相因
- (2) 物の「質料」(ὕλη) : 質料因
- (3) 物事の運動・変化の「始まり」(ἀρχή) : 機動因
- (4) 物事が「そのためにであるそれ」(τὸ οὖ ἐνεκα) : 目的因

また、彼が目的因を重視したことも周知の事実と言えよう。その主張は、たとえば、つぎの箇所に見られる。

ところで、自然学者は原因を両方とも〔質料因をも目的因をも〕解明すべきであるが、ことに最も主として目的因としての原因を解明せねばならない。(『自然学』200^a 32-33)

……自然の生成には目的や始動因〔機動因〕のような多くの原因が認められる以上、これらについても、本来どれが第一でどれが第二かを決めなければならない。とはいえ、いわゆる「目的」の方が第一であろうと思う。(『動物部分論』639^b 12-15)

アリストテレスのこのような目的重視の発想の背景には、彼の〈必然性〉に関する見解がひそんでいる。彼はまず『形而上学』において「そうあるより他ではありえないことを必然的にそうあるとわれわれは言っている。そしてこの意味での『必然的』に準じておそらくその他の意味のすべての必然的な物事も必然的と言われるのである」(1015^a 33-36)と述べている。さらに、その例として強制された行為、善や生存に不可欠なもの、

また、推論における前提と結論の関係などがあげられている。

しかし、特徴的なのは自然学者の〈必然的な原因〉の探究に関連して述べられている〈条件つき必然性〉と〈絶対的必然性〉の区別である。『自然学』2巻9章の議論はつぎのことを示している。「なにゆえに鋸は鉄製であるのか」という問いに、われわれは「物を切るという目的」をあげてそれに答える。この場合、「鋸はその目的という条件のもとで必然的に鉄製でなければならない」のであって、条件つき必然性を示している。

アリストテレスの好みの類似の事例は「家」と「土台」の関連である。「もしも、家が〔すでに〕生じ了っているとすれば、必ず土台が〔すでに〕生じ了っていなければならない……」（『後書』95^b 33-34）「もし家が存在すべきだとすれば、必然的にこれこれのもの〔そのための材料、煉瓦や石〕が生じるか、あるいはすでに存在していなくてはならない。この終り〔家〕はこれら〔煉瓦や石〕によって存在するのではなく、……存在するに到りもしない。」（『自然学』200^a 24-27）

これに反して、条件つきでない〈絶対的必然性〉については直截な例は与えられていないが、つぎの箇所を引用しておこう。

……もし土台がすでに生じている時には、必然的に家が生成しなければならぬのであろうか。いや、かの〔結果となる〕ものの生成が絶対的でない限り、もはや成りたたないであろう。だが、絶対的であるなら、土台が生成した時にも必然的に家が生成するであろう。……

……或るものの生成が〔絶対的に〕必然である場合に、生成することによって常にあるのでなければならない。……

したがって、或るものの生成が絶対的に必然的であるなら、その生成過程は円環をなし、再びもとへ戻ってこなければならない。……例えば、もしこのものが必然的に生成するのであれば、そのことによって、必然的にそれより先なるものも生成していなければならないし、もし先なるものの生成が必然的であるなら、より後なるものもまた必

然的に生成しなければならない。したがって、「絶対的な意味で必然的に」ということは円環的な運動や生成のうちに存するのである。

（『生成消滅論』337^b 16-338^a 5）

かくして、アリトテレスにとっては、循環的な自然現象、たとえば、夏至、冬至の到来や、雨-蒸発-雲-雨といった現象をのぞくと、条件づき必然性が見られる現象について、その〈目的〉をとらえることが自然学的知識の中核となった。知識は本来必然性の把握をめざすからである。彼は言う。

「自然学では〔その出発点は〕存在すべき者である。というのは、『健康とか、人間とかというものはかくかくのものであるから、これこれのことが存在しなければならない』とか、『起こらなければならない』というので、逆に『これこれのことが存在する』とか『起こった以上、健康とか人間とかが必ず存在する』とか『存在するだろう』とはいえないのである。」（『動物部分論』640^a 2-9）

しかも、彼のこのような目的優先論はもうひとつの特徴的な思考法、〈完了主義〉ともいうべきものと結びついている。条件づき必然性というのもそのひとつの現れである。彼は〈すでに生じて了ったもの〉から、つねに考察を始めるべきだと考えていた。「推論は後に生じ了ったものから始められる。……だが、これに反して、先に生じ了ったものから推論を始めることはできない。何となれば、……『これこれのことが〔或る時〕生じ了った』と語ることが真であるという理由によって、『これこれのことがその後で生じ了った』と語ることが真となることはないであろうからである。……これと同じことは〔やがて〕生ずるであろうものについても言える。すなわち、これこれのことが〔すでに〕生じ了ったからといって、これこれのことが〔やがて〕生ずるであろうということはない。」（『後書』94^a 27-36）⁽⁴⁾ この末尾の一句は〈予言〉の可能性を端的に否定するものとしても、注目に価する。

この思考法の典型的な例は、彼の有名な「可能態」,「(完全)現実態」の対概念である。彼は『形而上学』の関連箇所(第9巻)において、この対概念を未完了-完了の対比において説明しているが、とくにその現実態優先論を展開するにあたって、つぎのように述べている。「現実態は、実体においても、[可能態]よりも先である。……たとえば、成人は子供よりも、人間はそのたね[精子]よりも先である、けだし前者はすでにその形相[種]をもっているが、後者はそうでないからである……また、およそ生成するものは、すべて、或る原理にむかって、すなわちその終りにむかって進行する(というのは、なにかがそのためにであるそれ[目的]はそのなにかの原理[目的因]であり、生成はその終りのためにあるから)、しかるに、なにかの現実態は、そのなにかの終りであり、そしてこれのためにその能力[可能性]は修得されるのであるからである。」(1050^a 4-10)

この章句にもうかがえるように、アリストテレスにとって、〈目的〉——これは *τέλος* によって表現されることが多い——はわれわれが通常考えるような未来に関する意図といったものではなく、〈すでに実現されているなにか〉なのである。この点については、すでに R. B. Onians がギリシャ語の *τέλος* は、本来完了的な意味をもつことを指摘している⁽⁵⁾。それゆえ、アリストテレスには限られぬギリシャ人共通の心性の現れと言うべきであろう。

このような思考法をアリストテレスの説明パターンにあてはめると、つぎのような性格が浮かびあがってくる。まず、直接的で疑い難い可感的な事実が与えられているとして、その原因を探究するとする。〈月蝕〉や〈惑星の瞬き〉の例でいえば、原因として〈地球の介在による隠蔽〉や〈近さ〉があげられるが、その場合に、説明されるべき事実に原理的にも時間的にも先立つなにかが原因として〈はめ絵〉的に求められることになる。そして、説明されるべき事実は動かされず、もっぱら原因のほうがあれこれと

探しもとめられるのである。しかも、彼自身もはっきりと述べているように、起こるべき事象を予言することは原理的に否定されている。そこで、このような説明方式を《回顧的説明》と名づけることにしよう。この回顧的説明方式からすれば、論証によって得られる結論は、いわばすでに分かりきっている事実であるから、それを検証するという発想は生まれてくる余地がない。それゆえ、この方式は当然のことながら〈非検証性〉を特徴としている。

アリストテレスの回顧的説明の特質は、とくに目的論的説明が試みられるときに顕著となる。彼は『動物部分論』においてつぎのように言う。発生論的説明は「条件つき必然性を特に強調して、『ヒトの本質はこうなのだから、それゆえ人体にはこれこれの部分がある。なぜなら、そういう部分なしにはヒトはありえないから』というべきである。」(649^a 34-35) そして「概念的のみならず時間的にもそれ以前に親が存在した」ことに気づかなければならない。(640^a 25) つまり、ヒトの生成の目的は〈すでに存在している親としてのヒト〉なのであって、問題にされている個体の成人状態ではないのである。未来は、かくして、けっして知識の対象とはなりえないことになる。この点については、ギリシャ人全体の心性の問題として、つぎに考察することにしよう。

§4. ギリシャ的心性における過去と未来

B. A. ヴァン・フローニンゲンはその著書『過去からの発想——ギリシャ思想の一つの相についてのエッセー——』(野口ほか訳 未来社 1988)⁽⁶⁾において、つぎのような興味ある考察をしている。この書物は古代ギリシャ人が「過去の把握」のもとに生きていたことを論証しようと意図している。まず、言語学的に言って普遍的真理を表すのにアオリストという未完了過去時称を用いるギリシャ語の特性が指摘される。アオリストは過去の

客観的確實性を表す時称であり、ギリシャ人にとって客観的確實性は過去にのみ見出されるのである。このような傾向と事例とを著者は歴史、物語、系譜、哲学、宗教の領域において実証しようとする。もちろん、想起というソクラテス的認識論はその格好の事例である。その論旨の細部はともかく、結論的な叙述のいくつかはたいへん示唆に富む。「全体としての世界に関しては、ギリシャ人は、世界が現に今ある姿、もしくは円環的進行における現在の姿と異なったものとなる可能性があるとは決して考えなかった。」(165 ページ) 「ギリシャ人は過去の確實性からより強い影響を受けた。未来は希望または恐怖であり、せいぜいのところ期待または可能性である。現在はその意義を過去から借りてこなければ、真の意味をもたない。……ギリシャ人は中心に自分を据え、自分が立っているその地点から、説明と満足を求める。ギリシャ人は好んで、或る発展の最終地点に自分を置いてそこから振り返って見る。」(174-175 ページ) さらに、「ギリシャ語の未来時称が決して自律的な価値をもたず、また来たるべき時そのものを表わさないことは、すでに明らかにされている。ギリシャ語の未来時称はいわば現在を志向しており、話者の感情と直接結びついている。……ギリシャ人は、事実を表わす現実的未来、すなわち現実に起る、もしくは存在するであろうことを伝達する動詞の形態をもたない。」(158-159 ページ) そこで、隠れた未来について「直接知ることが不可能である以上、間接的に知識をうるしかない」(161 ページ) ので、神託や予兆にたよることになるが、その神託でさえも「予兆や夢と同じく、事が起こった後でのみ、その言わんとしたところがわかる」(162 ページ) という始末なのである。

まったくおなじような意見が別の古典学者によっても述べられている。コレージュ・ド・フランスの J. P. ヴェルナンは記憶術がギリシャ文化において演じてきた重要な役割を指摘して、よびおこされた過去は、単に現在に先だつ時間を表現するにとどまらず、現在の源泉そのものであったと

言っている。⁽⁷⁾ また、彼は別の著書のなかで、ヴァン・フローニンゲンの言う「ギリシャ人の場当り主義」と同趣旨のことを述べている。「個人と集団の未来への企てはきわめて制限されており、未来を予知する計画は行為のギリシャ的カテゴリーにはきわめて縁のないものであったから、実際的な活動は、時間に関わりをもたなければもたないほど、また、それが企画し、あらかじめ準備している目標に向かわなければ向かわないほど、完全なものとして現れてくることになる。」⁽⁸⁾

このように、アリストテレス説明論のもつ回顧主義は、ひとり彼自身にとどまらないギリシャ人一般の特徴ということになる。そして、この説明論は彼の自然学研究における説明において忠実に履行されている。⁽⁹⁾ その基本的特徴としての〈回顧主義〉あるいは〈反予言主義〉と〈はめこみ主義〉とは、すでに述べたように、〈非検証主義〉を結果する。G. E. R. Lloyd が詳細な検討のもとに指摘しているように、ギリシャの自然学には理論を支持する実証的事実の提示はあっても、それを検証しようとする実証的事実の探究はないというのも、⁽¹⁰⁾ その説明論の構造的特質に由来しているというべきである。私はこの特質を《後ろ向きのベクトル》と呼んでいるが、近代科学の成立はアリストテレス説明論の〈演繹体系〉という骨格を保持しながら、そのベクトルを〈前向き〉に変換したのである。その過程は長く、多くの要因の複合した結果であるが、この点についての考察は別の機会にゆずることにしたい。

註

- (1) アリスター・クロンビー 大谷隆昶訳 「ガリレオとヨーロッパの精神文化」 渡辺正雄編著『ガリレオの斜塔』 共立出版 1986 所載, 15-16 ページ。
- (2) 以下、アリストテレスからの引用はすべて、岩波版『アリストテレス全集』による。引用箇所は書名とベッカー版のページ数によって示す。引用章句中のカッコ〔 〕は訳者による補足であるが、さらに、[]によって筆者による補足を表す。また、翻訳原文の傍点は下線によっておきかえてある。『後

書』はもちろん『分析論後書』の略である。

- (3) 原因としての〈近さ〉については、『天体論』290^a 13-24 に述べられている。要するに、星までの距離が遠いと、視線の距離が大きくなり、そのために視線が弱まって、動揺するというのがその理由づけである。
- (4) アリストテレスは過去-現在-未来の事象間の関係を論ずるにあたって、きわめて特徴的な項の間の「同族性」(ὁμόγονον) なる概念を提出しているが、この概念についての分析は紙数の関係で割愛する。
- (5) Onians, Richard Broxton. *The Origins of European Thought about the Body, the Mind, the Soul, the World, Time, and Fate*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP, 1954. Part III Chap. XII τέλος 参照。
- (6) Van Groningen, B. A. *In the Grip of the Past: Essay on an Aspect of Greek Thought*. Leiden: E. J. Brill, 1953 の邦訳。著者はライデン大学のギリシャ学教授。
- (7) Vernant, Jean Pierre. *Myth and Thought among the Greeks*. London: Routledge & Kegan Paul, 1983 (仏語版 1965). Chap. 2 Mythical Aspects of Memory 参照。
- (8) Vernant, Jean Pierre. “Ébauches de la volonté dans la tragédie grecque.” J. P. Vernant & P. Vidal-Naquet. *Mythe et tragédie en Grèce ancienne*. Paris: F. Maspero, 1973. この論文におけるヴェルナンのギリシャ悲劇における意志の分析は、とくにアリストテレス倫理学とも関連してきわめて興味ふかい。
- (9) アリストテレスの『後書』における説明論は必ずしも彼自身の自然学的研究において実行されていないとする J. Barnes に対する反論は Gotthelf, Allan, and James G. Lennox, eds. *Philosophical Issues in Aristotle's Biology*. Cambridge: Cambridge UP, 1987. に見られる。とくに, III Definition and demonstration: theory and practice 参照。
おなじ趣旨の議論は Heron, Sherill Rines. “Demonstration and Explanation: An Examination of Aristotle's *Posterior Analytics* and *De Partibus Animalium*.” Diss. University of Washington, 1978. にも見られる。とくに, この論文は根拠の論証と事実の論証に関しても科学的見地から詳細な検討を試みている、傾聴すべき点が多い。
因みに Jonathan Barnes は二つの論証の区別にさして注目していないよう

である。

Barnes, Jonathan, trans. with notes. Aristotle's Posterior Analytics. Oxford: Clarendon P, 1975. 78^a 23, 26, 30 に対する註参照。

- (10) Lloyd, G. E. Magic, Reason and Experience. Cambridge: Cambridge UP, 1979.

ロイドの分析はヒポクラテス学派の医学的文献を中心として行われている。理論とテストの関係については、54, 151, 200, 210 ページを参照。

- (11) 念のため、つぎのことを付言しておきたい。私の論旨は、現代科学の見地からするとアリストテレスの説明論は誤っていると主張しようとするものではなく、むしろ、彼の説明論の内在的な特質、言い換えれば彼の思考法の枠組みを明らかにすることを意図している。しかし、「ビタミンB₁が不足する者は脚気になる。AはビタミンB₁が不足している。それゆえ、Aは脚気である。」という〈説明〉だけでは満足せず、「脚気の者はビタミンB₁が不足している。Aは脚気である。それゆえ、AはビタミンB₁が不足している。」という事実の論証から、〈ビタミンB₁の投与〉という治療におもむくほうが望ましい、というのが私の問題意識である。アリストテレスはなぜそうは考えなかったのか、というのがそもそもの考察の動機なのであった。